

照すれば、おおよその場所と方向を特定し、追体験することができます。

当館は《点音in白川公園》のうち美術館の敷地内にある3ヶ所を「名古屋市美術館パート」として所蔵しましたが、収蔵にあたりペイントだったものをコンクリート・プレートに替えました。この作品はマーキングされた場所の環境と密接に関わっていますが、時の流れとともに作品が設置当初の姿を失っていくのは明らかでした。環境を含めて変化が起これにくい美術館の敷地内のポイントを所蔵することで、一部ではあるもののこの作品を保存しようとしたのです。

そもそも美術館が作品を収蔵し保存・管理するのは、温湿度や光など刺激を与える要素を必要最小限に抑えることで、現実的には不可避である劣化のスピードを少しでも緩やかにして、鑑賞可能な状態を出来る限り長く維持するためという考えが根底にあります。人間は祖先がたどってきた道のり(歴史)を確かめたり推測したりする根拠として、残されたモノ(資料・史料)を頼りにしています。特に美術作品は、版画・写真や鋳造彫刻など一部の例外を除いて、世界にたった一つしか存在しない場合が多いことから、現存するものを守り後世に残そうとする意識が強く働く傾向にあります。しかし現代では完成当初の形を留めることにこだわらない、物理的・化学的に変化していくことも含めて作品であるという考え方をする作家も少なからずいます。また作品は必ずしも資料庫に入れられるものとも限りません。形を失う可能性のある作品と、どう折り合いをつけ見守り続けていくかは、美術館だけでなく文化財に関わる人々にとって大きな課題の一つなのです。

さて当館の話に戻って、《点音in白川公園》をどのように守っていくか、一学芸員として考えた私の答えは「できるだけ多くの来館者

が作家の制作意図を理解し、作品を利用して実際に耳を澄ませる体験をし、それによって得た気づきから考え方を広げたり深めたり、新たな発見を得たりする機会を提供する」ことでした。館としては、設置当初の形を残すことも大切ではあるのですが、この作品を通じて作家が伝えたいのは、視覚偏重の世の中にある、耳を澄ませることを介して世界を感じ取ることの面白さや重要性、“聞く”という行為の持つ可能性に気づくことではないかと考えたからです。それは活字や音声、映像による記録メディアによって十分に伝えられる類のものではなく、鑑賞者一人ひとりが体験して気づくことにこそ意味があることのように感じました。私は「あゆみ展」サブ担当としてワークショップや講演会を通じて鈴木昭男というアーティストの考えに触れるほか、くり返し《点音in白川公園》を体験し、書物などを頼りに環境や音に対する考え方を深めながら「“おと”探検隊」という家族向けワークショップを企画し、作家の了解を得て、2010年度から「キッズの日」のメニューに加えました。今年度までに年に2回のペースで継続的に実施しています。

「“おと”探検隊」は、《点音in白川公園》の体験と、音に対する考え方の拡大を目的としており、学芸員と美術館ボランティアは参加者の体験をサポートする役割を担います。まずは参加者とスタッフ全員で、普段の会話で使われる言葉の点検・整理を行うところから始めます。例えば「音と音楽と雑音、3つの言葉をどのように使い分ける?」「その基準を決めているのは誰?」などの問いを投げかけます。生活の中で特に意識せず過ごしてきたことを唐突に尋ねられ、参加者は困惑した表情を見せます。親子や兄弟姉妹の間で起こるひそひそ話も大切な時間として様子を見守っていると、実は音を聞いて感じたことを基準に区別をし

ているのは他でもない自分だと気づきます。自分というものは一人ひとり違うので、誰かが心地よいと思う音であっても、別の誰かには雑音にしか感じないことも起こり得ます。その逆もまた…ということが徐々に理解できると、参加者は当たり前に接してきた音を未知の不思議な存在として意識しはじめます。何となく分かったつもりでいたのが、実はよく分かっていなかったことに気づくのです。

他にもいくつかの禅問答のようなやり取りを通して、見えないけれど確かに存在するものに意識を向け、想像を広げる練習をしたところで、いよいよ《点音in白川公園》の体験です。マップを配り、《点音》の説明をした後は家族単位での行動としますが、全てのポイントを制覇することよりも、ゆったりと耳を澄ませる時間を大切にしたいと伝えていきます。いつどんな音が耳に届くのか、じわじわと少しずつ聞き取れるようになるのか、各自の感覚はその人にしか分かりません。季節や天気、時間帯によっても音の響き方や聞こえ方は微妙に異なります。その日、その場にたずんで耳を澄ませた時に受け止めたものの「一期一会」に集中することを《点音》体験では大切にしています。ちなみに参加者には、当日天気が悪くても小雨であれば傘をさすかレインコートを着た状態でワークショップを実施する、と伝えていきます。「雨が降っているという状況も、さまざまな環境のうちの一つと捉えて耳を澄ませばいい」という考えに拠るものです。体験から1時間後、再び全員で集まり、各ポイントでの体験はもちろん、視覚や嗅覚、触覚など全身を使って受け止めたことを報告し合い、それぞれの発見や気づきを共有します。「また白川公園を訪れる機会があれば、そのときの季節、天候、時間帯、今日とのちがいなども気に留めながら《点音》を体験してください」と呼びかけて、プログラムは終了となります。

「“おと”探検隊」ワークショップは、切り口として音を提示してはいますが、音だけに重点を

置いているわけではありません。普段の生活のなかで無意識に接しているものに改めて意識を向けることを意図しており、環境もその一つです。実際、学芸員、美術館ボランティア、来館者、さまざまな人間が《点音》マークにいざなわれて白川公園の中を歩き回り、《点音》や他の彫刻作品の状態、周辺の環境を定期的にチェックすることにもつながっています。もちろん参加者は毎回異なりますし、作品の保存にかかわる技術的・専門的なケアは美術館や担当部署が責任を持って行うべきですが、少しでも多くの人の目で作品の動向を見守り、毎回の小さな発見や変化、各自の感じ方を共有し伝え続けていくことが、この作品を守っていく一つの方法かもしれないと感じています。

今の生活環境がずっと同じ状態であり続ける保障はどこにもないことを、私たちは最近身をもって知ったばかりです。だからこそ本当に大切な、守りたいものは何か、そのために今何をしておくべきか。仮に形を留めておけなくなったとしても、別の方法でそれを守り、伝え、遺すことが可能かどうかを日々具体的に考え、点検し、行動することが必要になってくるでしょう。それは個人の価値観だけでなく、社会においてそれぞれが果たす役割についても同じことです。改めて美術館は何をすべき施設なのか、白川公園の散策を楽しみつつ《点音》マークの上でじっと耳を澄ませる来館者の姿を見守りながら、考え続けています。(3)

(参考図書)

「“おと”探検隊」を企画するにあたっては、以下の書籍などを参考にしました。

- ・R.マリー・シェーファー・今田匡彦『音さがしの本 リトル・サウンド・エデュケーション』春秋社 1996年
- ・レイチェル・カーソン著／上遠恵子訳『センス・オブ・ワンダー』新潮社 1996年
- ・展覧会カタログ『鈴木昭男 点音in和歌山2005』和歌山県立近代美術館・田辺市立美術館・熊野古道なかへち美術館 2005年
- ・展覧会カタログ『“ノイズレス” 鈴木昭男＋ロルフ・ユリウス』京都国立近代美術館 2007年
- ・幸田文『台所のおと』講談社文庫 1995年

は、しばしばギャラリーで展示していますので、現代美術を見るには、まずギャラリーに行ってみるのがお勧めです。でも、ギャラリーはなかなか敷居が高く、という方も多いかもしれません。美術館での展示は、多くの人に見えていただける機会という意味では貴重なものだと思います。感想に「ハコがちがえば、なんだか見え方もちがうような気がして」とも記していただきましたが、そういった、ギャラリーでの展示と美術館での展示の違いといったものも体験していただくと楽しいのではないかと思います。

「感銘を受けたとしか言いようがない気持ち。すさまじい刺激を体験した。」

この感想を読むと、そこまで感じ取った方がいらっしゃったのかと、やや驚いたりもします。もちろん、「すさまじい刺激」ばかりが芸術体験ではなく、一人ひとりの感性やこれまでに芸術作品を見た経験、その日の気分などによって、作品の受け止め方は違ってくるものです。

ノートにはそれぞれの作家さんへのコメントも沢山お寄せいただきました。皆さん、自分のお気に入りの作品を見つけていただいたようでした。この展覧会は、入場者数の多い展覧会ではありませんでしたが、感想ノートを拝見すると、来場していただいた方がそれぞれに作品や作家とのコミュニケーションを楽しんでいるのを感じました。(akko)

展覧会の舞台裏

作品の運搬と展示⑩ 柵を置く(2)

前回のこの欄で「海外の美術館では滅多に柵を見かけない」と書きましたが、実はその後間もなく訪れたルーヴル美術館の展示室でロープ状の柵が置かれているのを目撃しました。しかも特別展ではなく常設展の展示室。ロープ状の簡素なものなので、あまり威圧感はなく、「近づくな!」という警告感も希薄でしたが、しかしルーヴルにも柵が置かれるようになったのか、としばし感慨にふけりました。前回ルーヴルを訪問したのは数年前ですが、確かその折にはこのような柵は無かったと記憶しています。無かった柵が置かれるようになったということは、柵が無いと不安に感じるような事態がしばしば出現したということでしょう。

統計によると2011年のルーヴル美術館の入館者数は何と888万人! 1日あたり平均3万人近い入館者があるという計算になります。もちろん世界でダントツのトップ。ちなみに第二位はニューヨークのメトロポリタン美術館で年間約600万人ですから、いかにルーヴルの集客力が凄いかが分かります。しかも前年と前々年は約850万人で、2011年になって40万人近く増えています。世界的な不況も何のそのという、圧倒的なブランド力を誇っているわけですが、これだけ大勢の来館者が世界中から日々押しかければ、当然作品に対

する危険も増大するわけで、それまで無かった柵が置かれるようになるのもやむを得ずという判断なのでしょう。

美術館にとってはうれしいような困ったような事態ということなのでしょうが、ひょっとすると柵を置くようになったのは単なる入館者増だけが理由ではないかもしれません。というのは、気のせいかもしれませんが、以前に比べると展示室内の警備員の数が少なくなったように感じられるのです。つまり、作品を監視する人間を減らした分を柵で補ったというわけです。このような推測をするのはまんざら根拠が無いわけでもありません。まだ数は少ないものの、絵画作品でガラスやアクリルをはめたものが次第に増えてきているのですが、これも警備員の減少と関係していると思われるからです。近年は光の反射や映り込みを抑えた特殊なガラスが開発されているとはいうものの、やはりガラス越しに見る作品は絵の具の質感など微妙な表現を十分に味わえないもどかしさがあります。鑑賞をある程度犠牲にしてでもガラスをはめるということは、警備に必要な人件費を少しでも抑えるという目的があるからに違いありません。実はこれはルーヴルだけでなく、ヨーロッパ各地の美術館に広がりつつある傾向で、久しぶりに訪れた美術館で、「おや?」と首をかしげることが一度や二度ではありません。日本ほどに露骨な形ではないにせよ、この長期的な経済低迷のもとで、やはり美術館の置かれている立場はいずこも厳しさを増しつつあるのだ。そんな当たり前の事実を、展示方法の僅かな変化が教えてくれます。(F)

約13万人で、ともに会期は約6週間でした。ときどき美術館の企画で、来館者の投票による「所蔵品人気ランキング」が発表されることがありますが、松園の作品を所蔵する美術館では、ほぼまちがいないその名前を上位で目にします。最近では東京国立近代美術館が「みんなの東近美 作品人気投票」を実施し、やはり上村松園の《母子》が日本画部門の1位になっていました。市場でも、日本画の値段が軒並み下がっているなかで、松園の作品だけはずっと下がらないままだと聞きます。

人気が高い、ということはそれだけ所蔵者も作品を大切に扱い、また美術館では自分の館での公開の頻度が高くなることから、他の

感想ノートから

ポジション2012

名古屋発現代美術—この場所から見る世界

「ポジション2012 名古屋発現代美術—この場所から見る世界」(会期：2012年6月2日[土]～7月16日[月・祝])では、この地方で活躍する10名の作家たちが思い思いの作品を展示しました。展覧会のサブタイトル「この場所から見る世界」は、名古屋という場所に立って外の世界をじっと見ている彼らの視点に着目して付けたものです。どこか内省的な印象を与える彼らの作品ですが、それらが時には、却って遠い世界を表現していたりもします。作家さんたちは若手が多く、会期中の美術館はフレッシュな空気に包まれましたが、感想ノートにも若い方たちが沢山の感想をお寄せくださったようです。

「いつもギャラリーで拝見する作家さんの作品をこうして美術館で見られるというのは新鮮な心持でした。ハコがちがえば、何だか見え方もちがうような気がして、それは良いことなのか良くないことなのか・・・おもしろい企画だと思います。勉強になりました。ありがとうございました。」(愛知 23 女性)

この方の感想にあるように、作家さんたち

施設への作品貸出は控えざるをえなくなります。しかし、今回の松園展が開館25周年を記念する展覧会であり、東海圏では2004年の三重県立美術館での「上村松園展」以来、ひさびさの公立美術館での回顧展になるということから、所蔵者の皆様からは大変なご厚意をいただいて、80点を超える作品を展示することができそうです。松園の代表作である《序の舞》や《焰》は、作品保全の必要性から、残念ながら今回は出品ができませんが、奈良ホテル所蔵の《花嫁》や足立美術館所蔵の《楠公夫人》、さらには飛騨高山の光記念館の所蔵となる新発見の《紫式部図》など、隠れた名品がいくつもお目見えする予定です。(nori)

展覧会 現在進行形

名古屋市美術館開館25周年記念

上村松園展

2013年4月20日(土)～6月2日(日)

上村松園は、横山大観や東山魁夷らとともに、いま最も人気の高い日本画家の一人といってもよいでしょう。2010年には東京国立近代美術館と京都国立近代美術館で、決定版ともいえる「上村松園展」が開催されました。そのときの来場者数は東京で約16万人、京都で



上村松園《花嫁》1935年 奈良ホテル蔵

郷土の作家たち

日高 長太郎（ひだか ちやうたろう／1883－1926）

1921（大正10）年6月、大阪で初めて開催された東京写真研究会主催の「第十一回研展」では、〈愛友写真倶楽部〉の五名（榊原青葉、松浦幸陽、益子愛太郎、日高長太郎、大橋松太郎）が二等賞七点の内六点までを占め、その展覧は、「研展ゴムブロックの絢爛たる重圧感」、「〈愛友〉猛者連のゴム半切が物凄いはかり重砲列」とまで称された。前年来、様々な懸賞写真に上位入選を果たし、「旭日昇天の愛知組の進出恐るべきものが現出し」たとまで評された〈愛友写真倶楽部〉は、創設十年にして「研展」の、さらに言えば日本のピクトリアリズム（絵画主義的）写真の“時代表現”を確立するに至った。“愛友のゴム”とまで称されたその表現技法を強く推進したのが、日高長太郎（1883－1926）であった。

愛知県知多郡緒川の素封家に生まれ、書画骨董に囲まれ、幼い頃より漢文書籍を学んできた日高長太郎の作品には、山水画的な画趣から、表現主体が確立され、写実的な風景画へと展開する軌跡が確認できる。例えば、《山岳の雨》に対しては、「“神秘的な深山の美と、大観的な壮美感”とを新しき傾向として開拓したものとして、また「“山岳写真の完成者”の君一代の傑作と称すべき」作品として、発表当時から高い評価を受け、言わば日本のピクトリアリズムの最高傑作に挙げられたものであっ

た。撮影に同行した盟友・大橋松太郎は日高の撮影状況について次のように回想している。「上高地に行った時に雨に降られ雪に出会い、清水屋で三泊も滞在した。《山岳の雨》は清水屋の二階から前方煙雨にかすむ六百山の雄姿を撮られたもので、真に自然に再現させた雄大な気分の漲るよい作品でありました。」日高は自身の撮影手法について次のように述べていた。

「他郷に旅してその土地の情味と自然の変化とは一層の興趣を唆るものだ。私は宿に泊まる毎にその楼上から微妙の変化を眺むるを楽しみとします。感興到らば即ち寫すのであります。」

撮影旅行に出掛け、宿舍の二階から風景を眺める日高の姿には、どこか江戸後期の学者詩人たちが遊んだ「山水観照の作法」を彷彿とさせる。生活世界とはかけ離れた“白雲青山”の境位に対して、“潜思默想”を介して自然の機微に「感興到らば即ち寫す」こと、それこそが日高の「風景享受の作法」であった。（J.T.）



日高長太郎《山岳の雨》1918（大正7）年

どこがおもしろい?!

今回は、庄司達さんの《白い布による空間》です。庄司さんは、布による作品を制作していますが、その中では布という素材が時にはピンと張られることにより、また時には緩められることにより、様々な表情を見せてくれます。私たちの生活にとって欠かせない素材である布が作品として普段とは異なる存在感を持ち始めることは、何か不思議な気がします。

庄司さんは、布という素材との出会いについて、次のように記しています。

「故郷の名古屋に帰った私は、母校のデザイン科の教師になった。ある日、校内の文房具店の店先に積み重ねられているハンカチに目が引きつけられてしまった。生徒がその一枚を指でつまんでひらっとさせて買って行く光景に非常な新鮮さを感じたのだ。積み重なってボリュームとなった、布の束の最上部の一枚が飛び上って空間の中に融け込んで行くかのように思えた。私は興奮した。授業が終るのももどかしく、何十枚ものハンカチを手に入れて研究室に閉じこもった。」（浮かぶ布－庄司達展「柔・空間の散歩」（新潟市美術館）カタログより）

さて、このように庄司さんの思い入れのこもった布という素材で作られた作品について、観客の皆様はどんな感想をもたれたのでしょうか。7月28日（土）～9月30日（日）に寄せられた感想から、いくつかご紹介しましょう。

「しっかりと固定しているわけではないのに、一枚一枚が等間隔でつながれていて、とてもきれいでした。近くで見ると一枚ずつ離れているけれど、少し遠くから見ると、一本の太い柱のように見えました。小さな布が重なって大きな作品になるように、少しの努力も積み重ねれば、大きな力になると改めて教えられたような気がしました。白い枠の中に入っているものの、ガラスの中ではなくて、すぐ近くまで顔を近づけて見ることができて良かったです。」（Kさん 14歳）

「人生のステージを表現しているように感じました。光明（悟り）（迷いが無い状態）が一番上の光が当たっている布（その上の穴が開いた布は天国）。誰もが1番下（不安や迷い、煩惱が大半を占める）の状態から出発し、上のステージへ上がって行く。しかし、下の状態でも、光は必ずあり、日常の中に、悟りの要素が含まれている事を表しているように感じました。」（?さん ？歳）

「上から下へ流れる空間と時間を感じさせます。ブラックホール（上）→ホワイトホール（下）



庄司達《白い布による空間'68-6》
1968年（2003年再制作）

で万物が吸い込まれ新たな時空（宇宙）に生まれ変わる感覚を表していると感じました。」（MLXさん 43歳）
「一番上の大きな白い布から一番下の大きな白い布、その間にある切り込みにつながる小さな白い布を見ると、まるで時間の流れのようだと思います。人生には大きな出来事が多々あり、その間には小さな日常が流れています。もしあの作品にまだ続きがあったのならば、大きな分岐点ともとれたかもしれません。しかし、あの作品には続きなど存在しない。つまり一番上の大きな白い布が始まりで一番下の大きな布は終わりを示しているのではないのでしょうか。人生でいえば、生と死という関係のように思えます。実際あの2枚の白い布は対になるような形になっていました。生から死へと向かう時の流れ、人生を題材にしたのだろうと私は思います。」（田中さん 18歳）

「未来予想空間ですネ！あと、何百年何十年の間の空と空気の空間。」（ウーマンKAORUさん 48歳）

「見た時も、そこを去る時も、ずっと心に残っていたのは“不思議さと平安”でした。どうしてこんなにも、この作品を見て私の心に平安がおとずれているのか不思議でたまりませんでした。」（かよさん 23歳）

「全ての段に猫を乗せるべき。」（中村屋さん 29歳）

「白い布が多次元の空間を表している様に見えた。今のリアルな空間では重なり重なっている360度以上の角度を、重なる多くの空間として360度以上の空間を表している様に見えた。また上からの光がその多次元への現実世界での視点になっている様だ。」（ムシカゴさん 21歳）

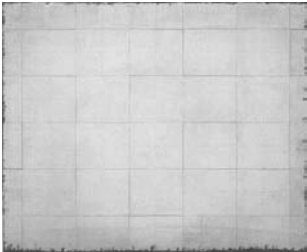
庄司さんは布を「宇宙と地球と私の力関係を自己表現として見せてくれる」格好の素材と考えている、と語っています。庄司さんが宇宙や地球といった壮大なスケールでものを考えていらっしゃるのことがわかります。観客の皆様のご感想にも、人生のステージ、多次元の空間、ブラックホールなど、スケールの大きいものが多くありましたね。庄司さんの考えと繋がるところがあるのではないのでしょうか。（akko）

杉戸 洋（すぎと ひろし／1970－ ）

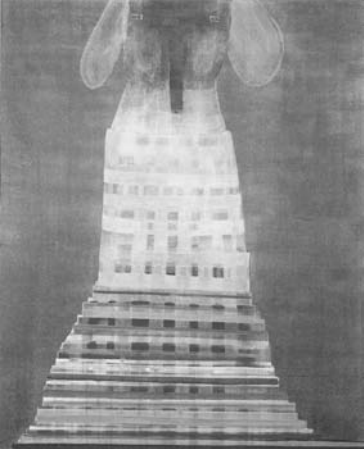
1970年名古屋市生まれ。3歳から14歳までニューヨークで過ごす。愛知県立芸術大学美術学部美術科日本画専攻卒業。

杉戸の描く作品は、具象をモチーフにしながら幾何学的な形態も多用し、日本画的とも言えるような平面的な画面構成のものが多く、日本画の顔料やアクリル絵の具など、画材の種類にとらわれずに様々な種類の絵の具を同時に使用した美しい色使いも魅力だ。杉戸を有名にしたカーテン越しの空間が描かれた作品など舞台の書割のようにも見える彼の作品は、絵画という虚構空間の中に広がる空間世界の多層性と、具象的なモチーフが抽象的な形態に溶け込んでいくように表されることで生まれるイメージの多重性によって、夢の世界のように私たちの心の世界につながり、見る人それぞれの遠い昔の記憶を呼び起こすような感覚に陥らせる。

杉戸の作品では、動物と人間が融合したような不思議な生き物が、アニマル・マンというモチーフとして時々登場する。《Elephant (p.p)》では、エレファントが目に見えている世界が《Red Eye》に画面化され、その視点の転換の仕方は、大宇宙と小宇宙の連関も思い起こすが、エレファントが向ける視線と対面する私たちは、杉戸の絵画世界ではその視線の先の私たちが存在している場所にも絵画の中の虚構空間が続いていくことを知ら



杉戸洋《Red Eye》2000年



杉戸洋《Elephant (p.p)》2000年

協力会通信

あなたも協力会の会員になって、ミニツアーに参加してみませんか？

名古屋市美術館の協力会では、毎年、春と秋に美術ツアーを実施しています。春は日帰りのバス旅行、秋は1泊2日の旅行（電車・バスの併用）が恒例になっています。

今年（2012年）の春は、京都国立博物館で「王朝文化の華 陽明文庫名宝展」を鑑賞して、京料理の「手をけ弁当」の名店で昼食を取った後、京都国立近代美術館で「すべての僕が沸騰する－村山知義の宇宙－展」を観覧して、最後は重森三鈴庭園美術館を見学するという、とても盛り沢山な内容のツアーでした。この秋には、瀬戸内方面（直島の李禹煥美術館、犬島アートプロジェクト「精錬所」、大三島美術館と大山祇神社・宝物館など）の周遊を予定しています。

最近では、この春秋の美術ツアーとは別に、近隣的美術館で開催されている展覧会を見学するミニツアーも積極的に実施しています。現地集合・解散で、美術館（展覧会）を訪問して、学芸員の解説を聞いた後に、団体で見学するというお手軽なツアーです。

昨年（2011年）は、6月に豊田市美術館の「フェルメール《地理学者》とオランダ・フラ

イベントガイド

■特別展「青木野枝 | ふりそそぐものたち」今日の日本を代表する彫刻家・青木野枝の創作世界を、豊田市美術館との2館開催により、版画などとともに新作を含めた彫刻作品で大規模に紹介します。

会期：[名古屋市美術館] 10月20日(土)～12月16日(日)
[豊田市美術館] 10月13日(土)～12月24日(月・祝)
料金：[2館セット券] 一般1,800円・高大生1,300円
[1館券] 一般1,100円・高大生800円

※いずれも中学生以下無料
【関連催事】
解説会

日時：12月8日(土)午後2時～3時30分
講師：角田美奈子（名古屋市美術館学芸員）
場所：2F講堂・無料・先着180名
ボランティアによるギャラリートーク
日時：12月4日(火)、6日(木)、9日(日)、12日(水)、13日(木)、15日(土)午前10時30分～と午後1時30分～（約1時間）

される。見ていると、実際に私たちが見ている世界の中に当たり前に絵画の虚構空間が存在しているような不思議な感覚になる。

最近では、絵の中の世界が現実世界に続いているかのように、画面の中のモチーフを立体作品にしたり、シンプルなすっきりとした画面に古い巨匠の作品につけられるようなゴテゴテの額をつけたり、作品をアトリエで作業をしている状態のように置いたり、卓越した空間把握に支えられた独特の作品の見せ方は、絵画世界につながっていくようでもあり、その誰にも真似できない空間は空間そのものがインсталレーション作品となっている。建築家青木淳とのコラボレーションを手がけるなど、ますます活動の広がりが期待される。来年開催されるあいちトリエンナーレ2013では、どのような作品世界を見せてくれるのか、とても楽しみである。（hina）

ンドル絵画展」、10月に碧南市藤井達吉現代美術館の「抱きしめたい！近代日本の木彫展」、12月に愛知県美術館の「生誕100年ジャクソン・ポロック展」を、今年（2012年）に入ってから、7月に名古屋ボストン美術館の「日本美術の至宝展」、同じく7月に愛知県美術館の「マックス・エルンスト フィギュア×スケープ展」、8月には名古屋市博物館の「マリー・アントワネット物語展」を訪れました。協力会の事務局から訪問先的美術館へ事前に依頼することで、特別な鑑賞ができると、会員の皆さんにはとても好評で、毎回20～50名程度が参加しています。

今後の予定としては、名古屋市博物館の「芭蕉－広がる世界、深まる心－展」や「古事記1300年 大須観音展」、豊田市美術館の「青木野枝 | ふりそそぐものたち」、愛知県美術館の「ウィーン1903年 クリムト『黄金の騎士』をめぐる物語展」や「応挙展」、徳川美術館の「ひなまつり展」などを計画しています。

これまでのミニツアーの参加者の方から投稿された楽しい報告や今後の実施予定の案内については、名古屋市美術館のHP (<http://www.art-museum.city.nagoya.jp>) の な か に、「名古屋市美術館協力会ブログ」のページがありますので、ご覧ください。

あなたも協力会の会員になって、美術ファンの仲間とともに、美術ツアーやミニツアーに参加してみませんか。（sy）

※特別展観覧券が必要です。
※都合により休止する場合があります。

■常設展 名品コレクション展Ⅲ

約5,000点のコレクションの中から、テーマに沿って展示しています。毎日、午前11時と午後2時から実施するボランティアによるギャラリートークとあわせてお楽しみください。

会期：10月13日(土)～1月6日(日)
エコール・ド・パリ：「筆触（タッチ）と絵肌（マチエール）」、メキシコ・ルネサンス：「フリーダ・カーロとディエゴ・リベラ」、現代の美術：「物語の絵画」、郷土の美術：「戦後の抽象彫刻」

■名古屋市美術館開館25周年記念

「上村松園展」

美人画の歴史に残る数々の傑作を世に送り出し、女性初の文化勲章を受章した上村松園。その清らかで格調高い美の世界をご堪能ください。

会期：4月20日(土)～6月2日(日)

休館日は月曜（祝日日の場合は翌日）、12月29日(土)～1月3日(木)です。また、館内空調工事のため、1月7日(月)～3月15日(金)まで臨時休館させていただきます。ご迷惑をおかけいたしますが、ご理解とご協力をよろしくお願いいたします。詳しくは [HP](http://www.art-museum.city.nagoya.jp) <http://www.art-museum.city.nagoya.jp> をご覧ください（ナ）

展評

2012年 7月10日(火)～9月30日(日)
国立国際美術館

リアル・ジャパネスク
世界の中の日本現代美術

この地域で活動している作家が活躍しているのを見ると、こちらの勝手ではあるが少し誇らしい気持ちになる。この展覧会は日本の現代美術の現況に切り込もうと「欧米美術の模倣、日本美術への回帰、あるいはショーアップした展示への依存など、近年よく見かける方法とは距離をとった」1970年代以降に生まれた作家が選ばれているということだったが、現代的な感覚で知的なコンセプトをもとに地道な作品づくりをしている作家が紹介されている印象であった。その中に名古屋に拠点を置く「放課後のはらっぱ」展に出品した佐藤克久が参加していた。彼の作品は「見ること」や「作ること」に関連し、思慮されたコンセプトに基づく「知的な遊戯」と言えようか。コンセプチュアルではあるが気難しくなく、詩的なユーモアが込められ、見た目も愛らしいのが魅力である。その佐藤は近年「絵画」をテーマにした作品を発表している。この展覧会にも出品していた切り抜いたキャンヴァスに彩色し、立体として空間に設置する「カットアウト」シリーズは、絵を構成する形や色という造形要素がまるで画面から飛び出てきたようで、絵画について考えを向かせる作品として興味深い。今

展評

2012年 7月13日(金)～8月26日(日)
岐阜県美術館

象徴派 夢幻美の使徒たち
一世紀末芸術の巨匠たち展

「象徴派」の画家というと、誰もが思い浮かべるのは、フランスのギュスターヴ・モローやオディロン・ルドン、ベルギーのフェルナン・クノップフやオランダのヤン・トーロップ、ドイツのマックス・クリンガーやノルウェーのエドゥアルド・ムンク、あるいはイギリスのラファエル前派やオーブリー・ビアズリーなどでしょうか。オーストリアのグスタフ・クリムトの名前を挙げる人もいかもしれませんが。フランスに「印象派」が登場した頃、近代社会の本流であった視覚優先の芸術に 対 し



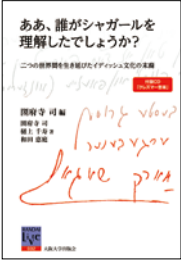
オディロン・ルドン《眼をとじて》
1900年以降 (岐阜県美術館蔵)

BOOK

『ああ、誰がシャガールを理解したのでしょうか？
二つの世界間を生き延びたイディッシュ文化の末裔』

因府寺司 編
因府寺司、樋上千寿、和田恵庭 著

シャガールという芸術家のイメージが、ここ数年のうちに大きく変わりつつあります。シャガールの絵画に隠された(大多数の人が理解する手がかりを持たなかった)一面、端的に言えば東欧ユダヤ文化という着想源についての理解が、次第に深まってきたからです。ユダヤ人という出自に注目して、シャガールの絵画を見直そうという海外の研究は、『シャガール《アレコ》とアメリカ亡命時代』展(2006年)などのカタログでしばしば紹介されてきました。ただ日本語で読もうとすれば、こうしたカタログの小論文や、作品解説の中に



回の展示は、絵画作品とともにひとつひとつを丁寧に見せていたこともあって、造形要素から像や印象が立ち上がる「絵画的感覚」をよりリアルに認識させられた。正直言うと、この展覧会に出品されていたような現代の知的な作品群は多様で、見るほうのアンテナも簡単にチャンネルを合わせられるものばかりではない。ただ、それぞれの作品を理解することとは別に、私自身が同世代を生きる人間だと感じさせられるものであった。様々な意味で華々しかった少し上の世代との距離感や、欧米受容からの離脱、美術界を含めた社会のある種の行き詰まり感、そういった中から生まれる作品が、現実在即しながらもどこか芸術至上主義的な方向に向かうことに共感できる。イメージから立ち上がる感覚を視覚化する佐藤の作品がここに位置づけられることで、イメージに溢れる現代に肉薄したもののでもであると理解できた。(hina)



撮影者：福永一夫

て、世紀末という時代を反映した「象徴派」は人間の心の奥に秘められた魂や眼には見えない観念に形象を与えようとしてました。陽光に溢れた外的な世界の写実的な描写ではなく、陰翳に彩られた内的な世界を象徴的に表現したのです。この「象徴派」を真正面から全面的に紹介しようという挑戦的な試みが、この展覧会です。「象徴派」の画家たち(関連作家も含めて51名)の総計219点(ただし展示替え有り)の出品作品は、岐阜県美術館の展示室を埋め尽くして、すべての作品をじっくり観覧すると疲れ果てるほどでした。私たち学芸員には、職業柄として、悲しいかな、優れた作品を鑑賞するだけでなく、出品作品の所蔵先をキャプションで確認する「習性」があるのですが、驚くことに、本展の場合には、すべての出品作品が日本の美術館のコレクションでした。その中心となっているのが、ルーヴル美術館とも対等に渡りあえるルドン・コレクションを誇る岐阜県美術館と日本有数のベルギー近代美術のコレクションを有する姫路市立美術館でした。すなわち、この展覧会を巡回開催する岐阜県美術館、姫路市立美術館、新潟県立近代美術館の3館をはじめとした日本の美術館のコレクションを総動員することによって、これだけの充実した内容の「象徴派」展が実現できたのです。まさに素晴らしいコレクションこそが、美術館の力であることを証明した展覧会でした。(sy)

断片的に登場するキーフレーズを集めていくしかなかったので、本書のように、新たなシャガール観をまとまった形で紹介する単行本の出版は待望されていたと言ってよいでしょう。「イディッシュ語」は東欧ユダヤ人の日常言語であり、シャガールの母語でした。イディッシュ文化圏はおおむね厳格なユダヤ教とは異なる信仰形態をもち、音楽や踊りが通過儀礼や生活に密着しており、また独自の文学やイデオム(慣用表現)をもっていました。シャガールの絵画にはヴァイオリン弾きが頻繁に登場しますが、音楽による魂の昂揚が信仰と結びついていること、厳密にはヴァイオリンとわずかに異なるフィドルという楽器が使われていること、靴屋の屋根の上で演奏するという不可解な状況が、単なる画家の妄想でないことなど、本書は興味深い見解にあふれています。「二つの世界」とは、ユダヤ教とキリスト教の世界であり、また社会主義と資本主義の世界でもあります。シャガールは対立する世界の間をうまく生き延びなければならなかったものであり、なぜ幻想的(に見える)世界を描き続けたのか、なぜ《ゲルニカ》のように力強い主張をもった絵画を描くことができなかったのか、明らかになっていきます。(nori)

展評

2012年 8月25日(土)～11月25日(日)
京都市美術館

京の画塾細見
一京都市美術館コレクション展
第2期

野花が咲き、小さな蝶々が舞う草原で、天空に向かって弓を引く若い女性。花の図案があしらわれたワンピースを身に纏い、矢を引く右手に皮の手袋を着ける一方で、左手には腕時計がはめられている。黄色と深紅のコントラストが画面を引き締め、さらには、襟元、白いストッキングに青いパンプス、ウェーブされた髪とほんのりと挿された口紅、そして涼しげな目元が、モデルと描いた画家自身の品の良さを醸し出す。その端麗な容姿を見せながらも、力強く弓を引き返る上半身の動きまでが、誇張されることなく、だが適確に表現されている。チラシの表を飾る丹羽阿樹子(1900―1988)《遠矢》1935(昭和10)年の実作品が見たく、“矢も盾もたまらず”京都まで出かけた。岡崎公園にある京都市美術館は、1933(昭和8)年に竣工され、堂々たる外観“帝冠様式”を誇る。設立・開館以来八十年に亘る「収集」の一端を見せる展覧会『京の画塾細見』は、戦前までの日本画作品およそ100点によって、近代「京都画壇」の成立と系譜、その精華を一堂の下に見せる画期的なものであった。同時代の洋画が西洋近代の絵画様式の受容に明け暮れ、美術学校と〈日本美術院〉を求心的存在として故事や歴史に基づく構想画を展開した東京の日本画壇の趨勢とは一線を画し、京都の画塾では社会や世相との同時代性を意識した優れた主宰者の下で、若き画家たちが、歴史性や社会性、さらには、“デカダン”な表現による耽美性にまで、自由にその画想を展開

CULTURE, MOVIE, DRAMA&MUSIC

若き弦楽四重奏団の競演
第1回宗次ホール
弦楽四重奏コンクール
2012年 9月22日(土)
宗次ホール

ヨーロッパを旅行するといつも感じるのが、どの街もヒューマン・スケール(人間の尺度)で出来ているということです。古い聖堂や教会のある広場を中心にして、市庁舎や組合会館などの行政施設が集まっていて、放射状に伸びる街路に沿って、美術館、博物館、オペラ劇場、コンサート・ホール、演劇スタジオ、映画館、図書館などの文化施設が建っています。ほとんどの施設は、少し歩くか、バスや路面電車に乗れば行ける距離にあって、その街に暮らす人々にとっては、文化・芸術が身近な日常であることを実感します。その街の中央駅に到着したときに、観光案内所を訪ねれば、季節にもよりますが、ほとんど毎日、何らかのコンサートが開催されていますので、旅人でも当日券で手軽に音楽を楽しむことができます。大きなコンサート・ホールから小さな室内楽ホールまであって、聖堂や教会が特設の会場になったりします。

【編集後記】暑さが落ち着いたと思ったのもつかの間、朝晩の冷え込みが急に厳しくなってきました。秋は行事も多くて長く楽しめる季節だったのは昔の話？最近は長い夏と冬の合間に、短い春と秋がある感じです。この季節に欠かさずしているのが、インフルエンザの予防接種です。効果に対する疑問の声も聞かれますが、不特定多数の方を迎える施設で働く身として、出来る予防対策は自己責任で取っておくという考えです。物心つく前から通っている馴染みの内科医院で診てもらうのですが、美術に造詣の深いお医者さんで「今は何の展覧会をしてるんだ？」とか「こないだ〇〇で美術館に行ってる…」とか、診療もそこそこに美術談義が始まります。幼心にとっても厳しかった先生の話し相手を自分がしていることに不思議な感じもありますが、短くも楽しいひと時です。今年もそろそろ打ちに行かねば…。寒さが本格化するのはまだこれから、皆さんもどうぞご自愛ください。(3)



「京の画塾細見」京都市美術館コレクション展 第2期」展覧会チラシ

したことを知らしめる。展覧会期中の毎週土曜日にはギャラリー・トーク、毎週日曜日には講演会が行われた。「なぜ京都画壇は誕生したのか」「なぜ上村松園は美人画家となったのか」「なぜ京都の名所絵は描かれなくなったのか」等々、と題した連続十四回にも及ぶその講演会には毎週通い続けたい“衝動”に駆られた。かつて、東京の区立美術館において、戦前の前衛美術について詳細な作品調査を行い、同美術館のコレクションはもとより、日本近代美術史研究の進展に大きく寄与した学芸員が、その最後の一年で見せた展示と講座は、歴史的事実を踏まえ、社会的な考察をも試み、なおかつ作品の魅力を語る、正しく期待以上の“好演”であった。(J.T.)

名古屋にも、愛知県芸術劇場や名古屋市民会館をはじめ、伏見のしらかわホールや電気文化会館ホール、栄の宗次ホールなどの素晴らしい音楽ホールが揃っています。その街の文化レベルを象徴するのが音楽ホールとするならば、名古屋は音楽に恵まれた街と言えます。そのなかで2007年に開館したばかりの宗次ホールが若い音楽家のためのコンクールを主催しました。クラシック音楽のなかでもマニアックで地味な分野である「弦楽四重奏」を採用したのは画期的でした。ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロという同属の弦楽器(4本)だけによる演奏は、均質な音色のなかで融合する多彩な表現を探究した究極の器楽合奏として、クラシック音楽の真髄を堪能できるものでありながら、一般的な人気がありません。コンクールの前日と前々日に実施された公開マスタークラスの様子もときどき覗いた上で、当日の午後1時から7時過ぎまで、全8団体の弦楽四重奏を聴き通して、音楽を創造することの難しさや楽しさ、喜びや苦しみを感じるとともに、熱い情熱を持って弦楽四重奏に取り組む若き音楽家たちの将来への可能性の大きさや広がり希望を抱きました。優勝したカルテット・アトム活躍を期待しています。また、名古屋には芸術大学もたくさんありますが、芸術家を目指す学生たち(音楽だけでなく美術も)を応援していくことに、美術館も取り組んでいければと思いました。(sy)